

---

---

SLAVIC  
RESEARCH  
CENTER NEWS

No.115 November 2008

---

---

## 研究の最前線

◆ 2008年度冬期国際シンポジウム ◆  
「環黒海地域の跨境政治」の開催について

2008年度冬期国際シンポジウムは、北海道大学の重点配分経費の援助を受けて、3月5～6日、北海道大学創生科学共同研究機構ビル（北キャンパス）においておこなわれます。「環黒海地域の跨境政治」をテーマとします。だいぶ前から暖めていたトピックではありますが、南オセチア戦争のために急に世の関心を集めるようになりました。これまでに、ある程度、具体化されたセッションは下記の通りです。

3月5日

第1セッション：環黒海地域の広域史

報告者：ミハイル・シュカロフスキー（センター）、黛秋津（東京大学）

第2セッション：環黒海におけるトルコ・ファクター

報告者：ムスタファ・アウディン（トップ大学、アンカラ）、澤江史子（東北大学）

第3セッション：EU拡大とルーマニア、ブルガリア、モルドヴァ

報告者：ルーク・マーシュ（エジンバラ大学）、六鹿茂夫（静岡県立大学）

3月6日

第4セッション：環黒海地域と宗教

報告者：メフメト・ギョルメズ（トルコ宗務局）、他1名

第5セッション：広域的な視点からの非承認国家問題

報告者：レベッカ・チェンバレン（ロンドン経済大学）、セルゲイ・マルケドノフ（政治軍事研究所、モスクワ）、佐藤圭史（センター／日本学術振興会）

第6セッション：テーマ未定（「色つき革命5周年」または「ロシアと環黒海」）

今回の国際シンポジウムのペーパーは、自前の論文集として出版するのではなく、ワシントンDCの *Democratizatsiya* 誌と提携し、特集号を出すことになっています。そのため同誌を代表して、ヘンリー・ヘイル・ジョージワシントン大学教授が参加します。彼は2004年冬シンポに続いて2度目の参加となる知日家です。

創生機構ビルは宿泊施設から遠いところが難点ですが、非常に美しい会場で、快適な環境での活発な討論が期待できるでしょう。[松里]

◆ 国際ワークショップ「人文学的アプローチによるポーランド ◆  
地域主義研究：言語・文化・芸術を通して考えるポーランドの周縁地域」

2008年度の地域研究コンソーシアムの公募「次世代ワークショップ」に、上記のワークショップ企画が採用されました。

この企画は、ポーランドの文化的中心であるワルシャワやクラクフではなく、クレスィ、シロンスク、カシュブといった周縁地域に焦点を絞り、ポーランド研究の新たな展開の可能性を提示するものです。隣接地域の文化に直接的に晒されてきた、こうした「周縁」における地域主義について、特にこれまで手薄になっている人文学的視点から考察を加えていきます。

このワークショップは、岩下明裕センター長をアドバイザーに迎え、ポーランド文学研究の小椋彩氏（早稲田大）と野町素己（センター）が中心になって企画されました。

目下、最終プログラムを作成中ですが、ワークショップは研究者9名の報告による3セッション（文学、芸術、言語）から構成され、うち、ポーランドからはカシュブ語研究者であり社会活動家としても著名な Jerzy Treder 氏と、ウヰムコ言語文化教育者 Mirosława Chomiak 氏をお招きする予定です。この他に、ゲストスピーカーとして沼野充義氏（東京大学）をお迎えする予定です。

ワークショップの開催日は、2009年1月10日（土）、開催場所は東京大学本郷キャンパスとなっています。ワークショップのプログラムは、近日中に本企画共催のスラブ研究センターのHPに掲載いたします。[野町]

◆ 日中韓スラブ学会長の共同声明 ◆

センターニュース第113号で紹介した日中韓3国の共同シンポジウムに並行して、第1回の3国スラブ学会長サミットが開かれました。日本からは、袴田成樹 JCREES 会長の代理として宇多文雄副会長が出席しました。そこで合意された事項を2ヵ月かけて共同声明にまとめ、5月7日付で3会長が調印しました。このたび声明を和訳しましたので紹介します。

この共同声明の内容のうち、中国の ICCEES 加盟はすでに実現されましたし、第1回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスも、来年2月5～6日開催に向け、すでにパネル提案が締め切られたところです。この共同声明は、これからも、東アジア・スラブ研究者コミュニティを建設する上での道しるべとなるでしょう。

なお、第113号で、今年2月の3国コンフェレンスを、「第1回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会」として紹介しましたが、これは私の勇み足で、北大とソウル大の共催シンポを拡大したに過ぎないものに、このような名称を許すことは不適切であると韓国側からクレームがきました。これについては私が陳謝し、正式に日中韓3学会が共催する、来年2月に北大で開催されるものが「第1回」のスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスとなります。[松里]

韓国スラブ学会（KASS）、東欧・ロシア・中央アジア研究中国学会（CAEERCAS）、  
および日本ロシア・東欧研究連絡協議会（JCREES）の代表者による共同声明

制度化された学術コミュニティの不在こそが、東アジアにおけるスラブ・ユーラシア研究の発展を妨げている最大の原因であるという共通の認識に基づき、CAEERCAS、JCREES、および KASS は以下の点で合意した。

1. 3組織はユーラシア・アジア的な視角を打ち出すことにより、世界のスラブ・ユーラシア研究の発展に寄与していく。この目的のために共同研究、セミナー、ワークショップ、出版、研究者・院生の交換等を組織する。

2. 3組織はスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスを年1回の定例行事として3国持ち回りで開催し、それを国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）の地域事業として認証させることに合意した。また第1回の東アジア・コンフェレンスを2008年末～2009年初頭に札幌で開催することに合意した。

3. コンフェレンス組織の円滑化を図るため、3組織は、それぞれの代表者から成る運営委員会を設立する。この委員会の主な役割にはコンフェレンスのテーマの設定、パネル・ペーパーの公募、ペーパーの水準管理を含む。

4. 3組織はスラブ・ユーラシア研究国際コミュニティへの東アジアの貢献度を増大させていく。その手始めに3組織はストックホルムで2010年7月26-31日に開催が予定されているICCEES第8回世界会議において、できる限り多くのパネルを組織することを目指す。

5. 3組織は2015年の第9回ICCEES世界会議を東アジアの都市に招致する可能性について真剣に検討する。もしこれが実現したなら、東アジアのスラブ研究者共通の名誉であり責任であるとの認識に基づき、東アジアのスラブ研究コミュニティ全体がホスト組織を援助するため全力を尽くす。

6. 3組織の代表は定期的に執行委員会を開くこととし、次回の委員会は札幌で2008年秋までに開催する。そこでは2010年のストックホルム世界会議への参加について、またICCEESと地方組織（KASSとCAERCAS）の関係などについて入念に討議する。

2008年5月7日

パク・スーヒョン  
KASS代表

李静杰  
CAERCAS代表

袴田茂樹  
JCREES代表

### ◆ 第1回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンフェレンス ◆ (2009年2月5～6日)

今年5月7日に調印された日中韓スラブ学会長共同声明に基づいて、2009年2月5～6日に北海道大学で開催される第1回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンフェレンスのパネル提案は、10月末日で締め切られました。北大学術交流会館に3会場が確保され、政治経済、文学・文化・言語、歴史の3つの柱で、それぞれ5つまでパネルを収容することができます。この催しは、ICCEESの地域事業として認証されているので、パネル提案書はICCEESのホームページからもダウンロードでき、そのためアメリカ、ヨーロッパ、ロシアなどからも多くの問い合わせがありました。[松里]

### ◆ 中国スラブ学会のICCEES加盟、韓国スラブ学会とICCEESの関係正常化 ◆ (ICCEES日本代表より)

去る6月26～27日、2010年に国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）世界大会を予定するストックホルムで、ICCEESの執行委員会と評議会（議決機関）がおこなわれました。最大の課題は世界大会に向けた準備状況の点検でしたが、東アジアのスラブ研究者にとっては、長年の間正常とはいえなかった韓国スラブ学会（KASS）とICCEESの関係が正常化されて久々に代表、パク・スーヒョン慶熙大学教授とシン・ボムシク・インチョン大学教授（当時）が

出席し、しかもそこで中国スラブ学会（CAEERCAS）の ICCEES 加盟問題が話し合われるという意義深い会議でした（背景についてはセンターニュース第 112 号の松里の記事を参照）。残念ながら、中国代表はヴィザ上の理由でストックホルムには来られませんでした。代表不在のもとでも加盟問題を話し合っただけという李静杰 CAEERCAS 会長の明確な意思表示を受けてこの問題が討議され、評議会は加盟を認めました。

私は言いたいことは事前に散々言ってあったので黙っていましたが、韓国代表のパク氏が、「中国の研究者は国の公式見解を繰り返すばかりで自分が思ったことは言わない」といった偏見に対して、自分自身の中国との協力経験を根拠に反論しました。私は、ジョン・エルスワース ICCEES 会長のスピーチに深い感銘を受けました。「ICCEES が、冷戦下で、欧州大西洋勢力が対立陣営を研究する目的で生まれたことは秘密ではない。冷戦が終わって世界が変わったのだから、ICCEES も遅かれ早かれ変わらざるを得ない。その意味で、中国の加盟は歴史的一步である」。トマス・ブレマー副会長は、「必要な書類上の要件を満たして加盟を求めている国に、一体どういう理由で断れるのか。あんたたちは嘘つきだから入れないともいうのか」と正論を述べていました。中国スラブ学会は、来年の ICCEES 執行委員会を北京で開催するよう招待しているのだから、視察した上で、加盟問題を執行委員会に一任するという案も出されましたが、中国加盟のような重要案件を執行機関に一任するのは手続き上問題があるということで、今年、本来の議決権を持った評議会で決めてしまおうということになり、加盟承認に至ったものです。

さて、来年の北京での ICCEES 執行委員会は、2004 年に木村汎・前日本代表のもとで日本で開催されて以来のアジア開催となります。欧州の執行委員の中には、中国までの旅費を工面するのは大変だとこぼす人もありました。たしかにこれは深刻な問題ですが、アジアやオセアニアの国の代表は、そのような出費に毎年頭を悩ましているのだということも忘れていただきたいです。

前年からの懸案であった、2015 年 ICCEES 世界大会の開催地問題は、リヨン（フランス）が辞退したため、グラスゴーが有力候補となりました。候補地のひとつである日本にとっては、スラブ研究者の層が薄いフランスが降り、それよりはるかに実力のあるスコットランドがライバルとなったことで、あまり嬉しい展開ではありません。たとえそうでも、ストックホルムに向けたパネル提案を旺盛におこなうべき時期であることには変わりありません。パネル提案は進行中（2009 年 2 月 28 日締切）で、提案書は、[http://www.iccees.org/world\\_congress\\_8.htm](http://www.iccees.org/world_congress_8.htm) からダウンロードできます。[松里]

◆ 笹川平和財団との共催シンポジウムの開催 ◆  
「ロシアと米国の新冷戦？ ユーラシアの今を読む」

2008 年 9 月 11 日、センターは東京の日本財団ビルにて、笹川平和財団との共催により、「ロシアと米国の新冷戦？ ユーラシアの今を読む」を開催しました。笹川平和財団との共催は、2007 年 7 月に同じ場所で実施した「上海協力機構：日米欧とのパートナーシップは可能か」に次ぐものです。今回の企画は、2008 年 8 月初頭の南オセチアに対するグルジアの軍事行動、それに対するロシアの過剰ともいえるグルジア領内への「反撃」を受け、世界に広まった「米ロの新冷戦」言説の実相を検討すべく、急遽、組織されました。センターの急な申し出を快諾いただき、場所と広報を担ってくださった笹川平和財団ならびに担当の小林香織さんには心よりお礼申し上げます。シンポジウムには 120 人を越える参加者が詰めかけ、この問題への関心の高さと広がりを感じました。今回の催しには特にメディア関係者の参加が

多かったようです。センターとしては、スラブ・ユーラシアにかかわるアクチュアルな問題に対して、今後とも、内外の様々なシンクタンクなどとの共催により、分析を発信していきたいと思っています。なお、シンポジウムの模様は創刊もない「スラブ研究センター・レポート」にすでに収録されております。[岩下]

### ◆ シンポジウム「国境としての小笠原を考える」の開催 ◆

2008年10月17日、小笠原村父島において、センターと日本島嶼学会の共催によるシンポジウム「国境としての小笠原を考える」が開催されました。2007年9月の与那国島での国境フォーラム（長谷川俊輔根室市長と外間守吉与那国町長による「東西自治体サミット」）、2008年6月のセンターにおける国境フォーラムII（専門家による日本をめぐる国境問題の討議）に次ぐ第3弾として企画されたこの催しは、小笠原諸島返還40周年記念事業研究交流フォーラム「島民と考える小笠原の可能性」のメインイベントとして、



南の島で憩う各自治体からの代表者たち

根室市、対馬市、与那国町の三自治体の国境問題・対外交渉実務家にホストとなる小笠原の担当者を加えておこなわれました。ほぼ丸1日（25時間半）かけて船でしか往来できない小笠原諸島にむかう旅はなかなか刺激的で、参加者たちは大いに密度の濃い交流を楽しんだようです。小笠原村による厚いもてなしに三自治体の皆さんも満足されたと聞いています。本企画の実施に熱意をもってあたってくださいました日本島嶼学会の長嶋俊介、山上博信の両理事、早稲田大学の佐藤由紀さんには特に心よりお礼申し上げます。スラブ研究センターは、いまや日本における島嶼研究の「全国共同利用施設」とさえ言われはじめていますが、バルト海やオホーツクの存在を考えると、「島嶼とユーラシア」といった一見、奇異な設定も新しい切り口を提供するものかもしれません。シンポジウムの式次第は下記の通りですが、その内容は「スラブ研究センター・レポート」のなかで再現される予定です。

#### あいさつ

前田弘毅（センター客員准教授：科研費プロジェクト「ユーラシア秩序の新形成」研究分担者）  
司会

田村慶子（北九州市立大学教授：科研費プロジェクト「ユーラシア秩序の新形成」研究分担者）

#### 報告

田里千代基（沖縄県与那国町役場：国境交流推進特命事務局長）

小田嶋英男（北海道根室市役所：総務部長）

玖須博一（長崎県対馬市役所：地域振興課係長）

渋谷正昭（東京都小笠原村役場：総務課長）

#### コメンテーター

山田吉彦（東海大学准教授：『日本の国境』（新潮新書）の著者）

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、次の専任研究員セミナーが開かれました。

9月19日：田畑伸一郎 “Influence of the Oil Price Increase on the Russian Economy: A Comparison with Saudi Arabia”

センター外コメンテータ：細井長（国学院大）、上垣彰（西南学院大）

9月29日：岩下明裕 「広域ユーラシア：国際関係の新たなパラダイムを求めて」

センター外コメンテータ：遠藤乾（北大公共政策大学院）、湯浅剛（防衛研究所）

田畑論文は、9月初旬にモスクワで開催された欧州比較経済体制学会の大会で報告されたものです。ロシアとサウジアラビアの経済の比較を通じて、近年の原油価格上昇がロシア経済に与えた影響をより明確に特徴づけることが狙いとされています。両国の公式統計に基づき、石油生産・輸出の近年のトレンド、国内総生産・国民所得への寄与と経済成長の要因、国家予算の役割などの分析がおこなわれ、特に、両国の通貨・為替政策の違いに着目して、「ロシアの経済ブームの特徴は自国通貨高により増大した輸入で個人消費が加速化されている点にある」と強調されています。コメンテーターからは、サウジアラビアの公式統計が全く信頼できない点や、“swing producer”として国際価格に影響力を行使してきたサウジと異なりロシアでは技術的な原因から国際市場の動向に応じて生産を柔軟に変化できない点、民間企業によって担われているロシアの石油産業と単一の国策会社が石油産業を支配するサウジの違いなど、論文の中では触れていない重要な側面についての指摘がなされました。[山村]

岩下論文は、国際政治学会が刊行する本のために書かれたものです。三角形・四角形・円を多用した概念図（その多くが本に収録されないのは残念です）を駆使しながら、国境と広域的な国際政治の関係や、上海協力機構の位置づけを論じています。討論では、バランスオブパワーと地政学の関係、国境を接すること・接しないことが国家間関係にとって持つ意味の多様性、「米国＝遠い隣国」論の妥当性、ユーラシアという地域概念の問題などが話題になりました。センター研究員同士の忌憚ない意見のやりとりに、コメンテーターの一人からは「ワイルドな研究会」という感想をいただきましたが、今後もワイルドな伝統を維持していきたいと思います。[宇山]

◆ 研究会活動 ◆

8月18日 R. エルドリッチ（大阪大） “The Soviet Factor in Postwar US-Japan Territorial Issues: Amami, Ogasawara, and Okinawa during the Cold War”（センターセミナー）

9月16日 粕谷典子（早稲田大・院）「イヴァン・トゥルゲーネフ：『筋の欠如』の詩学」；木裕子（大阪大・院）「ウクライナ語『リドナ・モーヴァ』の多義性とその解釈」（鈴木・中村基金奨励研究員報告会）

10月23日 S. ヴラディ（極東諸民族歴史学・考古学・民族学研究所、ロシア／センター）「19世紀前半明治維新前夜の日本在住中国人学者の著作について（ロシア語）」；L. ミッソノヴァ（民族学・人類学研究所、ロシア／センター）「トナカイ飼育業とサハリン・ウィルトアイデンティティ（ソヴィエト～ポスト・ソヴィエト期）（ロシア語）」（センターセミナー）

10月29日 河原朗伸（北大・院）「モンテネグロ滞在について」（昼食懇談会）

## サンクト・ペテルブルグ：ロシアのキリスト教 教会の中心地として

ミハイル・シュカロフスキー（サンクトペテルブルグ国立中央文書館、  
ロシア／センター 2008 年度特任教授として滞在中）

サンクト・ペテルブルグは3世紀にわたるその歴史の大半、かなりの程度、ロシア国家のキリスト教会の中心地の役を果たしてきた。建都後間もない1721年、この北の首都には最高宗務院—ロシア正教会の統治機関が設立され、1918年初めに廃止されるまで存在し続けた。サンクト・ペテルブルグには神学アカデミー、神学校、[ロシアの]4つの主要な大修道院のひとつであるアレクサンドル・ネフスキー大修道院も位置していた。聖使徒ペトロの街は北西ロシアの伝統を受け継いでいたが、ここは正教が深く根を下ろした地域であった。この地域はロシア文化とロシアにおける正教の基盤を生み出した最初期の古ロシア国家の一部であった。

1917年までに首都の主教区は国内最大で最も繁栄したもののひとつとなった。ペトログラードとその最寄の近郊には498の正教寺院があり、当時の首都大主教管区全域には、さらに750の正教寺院があって、16の修道院では約1700名が生活していた。10月革命の後、ロシア教会に苛烈な迫害が襲いかかっても、主教区内では後に殉教者として列聖された100を超える聖職者がミサを続けた。その中にはペトログラードとグドフの府主教ベンヤミン（俗名カザンスキー）や致命者長司祭イオアン・コチューロフを数えることができる。レニングラードは1920年代から1980年代にかけてもまた、かなりの程度、国内の教会の中心地の役を果たし続けた。20世紀のロシア正教会の総主教のほとんどすべてがレニングラード府主教であるか（アレクシーI世、ピーメン、アレクシーII世）、もしくは主教区の臨時監督者（セルギー）であったことは偶然ではないのである。

サンクト・ペテルブルグの教会人たちは、国家の政治・社会活動におけるあらゆる変化に敏感に反応した。まさにこの都市で親ソヴィエト政権的な教会革新運動（1922年）とそれに対抗するイオシフ派の運動（1927年）が発生したのである。1917年時点のペトログラードでは、正教会は際立って確かな立場と一般大衆に対する影響力を有していた。したがって権力の極端な行動に対する抵抗は不撓不屈のものであった。たとえば、1918年1月のアレクサンドル・ネフスキー大修道院擁護運動は、長年におよぶ粘り強い教会の闘争の中でおそらく唯一のソヴィエト政府に対する大勝利を得ている。そしてトロイツキー聖堂に属した最後の政権反対派であるイオシフ派の共同体もまた、同じレニングラードで1943年まで合法的に存続しえた。サンクト・ペテルブルグ主教区の現代史もぬきんでて豊かである。そのことは、ソヴィエト時代にこの主教区を以下に挙げたような一群の傑出した府主教たちが率いた事実だけで十分だろう。聖ベンヤミン（俗名カザンスキー）、イオシフ（俗名ペトローヴィフ）、聖セラフィム（俗名チチャーゴフ）、アレクシー（俗名シマンスキー）、グリゴリー（俗名チュコフ）、ピーメン（俗名イズヴェコフ）、ニコジム（俗名ロトフ）、アレクシー（俗名リヂゲル）その他。

ファシストに包囲されたレニングラードでは、封鎖の期間中、10の正教寺院が活動しており、市民の精神力や物質的な支援を積極的に促した。1943年10月11日、12名のレニングラードの聖職者が、ソ連時代で初めて政府の賞「レニングラード防衛賞」メダルを授与された。1980年代の終わりになると主教区の目覚ましい発展が再び始まった。この時代主教区を率いたのは現総主教アレクシーII世である。何百という寺院・修道院が再び開かれ、アレクサンドル・ネフスキー聖公、ソロフキ修道院の奇跡者たち、サロフの聖セラフィム、ベルゴロドのイオ



サントペテルブルクのワシリー島

相互に影響し、混ざり合う場所であり、伝統的なロシアの諸地域と西側の隣接地帯なのである。現在のロシアの境目では、最大かつ何世紀にもわたる起源をもつカトリックとルター派の信仰が普及している。ロシア帝国のうち、おもにルター派の5民族（ドイツ人、フィンランド人、エストニア人、ラトヴィア人、スウェーデン人）とカトリック系2民族（ポーランド人、リトアニア人）の多くの人々が、ペテルブルグ帯でのみロシア人と肩を並べて生活していたのである（部分的にはいまだにそうして生活している）。

彼らのうちにはペテルブルグ建都以前（フィンランド人）や18世紀（ドイツ人、ポーランド人、リトアニア人）にこれらの土地に現れたものもいる。ロシア福音派ルーテル教会の中央組織、すなわち総局兼サント・ペテルブルグ（ペトログラード）監督法院が、また国内のローマ・カトリック教会の主座であるモギリョフ大主教座と帝国唯一の神学アカデミーが1917年の10月革命までに北の首都に誕生した。そして1990年以降現在に至るまで、ロシアその他の国家における福音派ルーテル教会の長である事務局（最近までゲオルグ・クレチマール大主教）、福音神学校、カトリックの高等神学校がペテルブルグに再び展開している。

バルト海は1500年以上にわたり、沿岸に住む諸民族を結ぶ北欧の「地中海」であり、ロシアの北西部においてもこの相互影響関係はまったく一目瞭然に現れた。キリスト教受容以前の時代のノルマン、フィン・ウゴルそしてスラブの文化の交じり合いは、ここに735年以前に建てられた最古の街のひとつラドガ建都に起因する。スラブ系の宣教団の影響のもと、先住民のフィン・ウゴル系諸民族の間では11世紀から15世紀にかけて正教が漸次広まっていった。古代ロシアの国家が存在していた実質上ほとんどの間、北西部の大地はスウェーデン人とドイツ人のノヴゴロドへの対抗の舞台であった。福音派ルーテル教会は4世紀間、ローマ・カトリック教会は3世紀間にわたる歴史をこの地に持っているのである。18世紀の初頭にインゲルマンランドと呼ばれていた領土がロシア軍によって奪回された際、そこにはフィン系の住民が多数残った。17世紀に既にインゲルマンランドで教育的・文化的機能を果たすようになっていた地元のルーテル教会は、その後もその教区民を維持し続けた。この教会の教義は農民をふくめたすべての大衆がこれを受け入れることを前提としており、理想として彼らに宗教文学を読む能力が求められた。そのために、それぞれの教区にはいくつかの学校、図書館、聖歌隊などが存在していた。

ペテルブルグは1703年の建都以降、ロシア国内でもっとも多民族的で多宗教的な都市のひとつであった。1910年の首都の全人口1,905.6千人のうち、ロシア人は82.3%を数え、ポーランド人が65千人（3.4%）、ドイツ人が47千人（2.5%）、エストニア人が23千人以上、ラ

アサフ、サント・ペテルブルグの庇護者として名高いクロンシュタットの聖イオアン神父とペテルブルグの聖女クセーニャらの聖骸が宗教史博物館から教会へ返還された。このプロセスは21世紀のはじめにおいても継続中である。

しかしこのネヴァ河畔の町に広がっているのは正教会だけではない。サント・ペテルブルグとその周辺地域はその独自性で際立っている。ここは宗教がその一要因をなす民族文化が相

トピア人が18.5千人、フィンランド人が18千人、リトアニア人が11.5千人、スウェーデン人が3千人であった。1916年から1920年にかけて、ロシアの西方諸県からの避難民の流入にともなって、非ロシア人人口は最多に達した。宗教生活はロシア人ばかりでなく、多民族的な首都とその周辺に住まうその他の民族にも特別な意味合いを持っていた。教区こそが民族共同体の結集する中心点であり、ペテルブルグに住まう諸民族の文化的中心地となったのである。首都においては正教信者が圧倒的多数を占めており、その上で外的な世俗要因と内的な教会のその組み合わせや、様々な宗教的伝統に対する寛容の原則に基いた混ざり合いがあり、そこにペテルブルグ文化の独自性があった。諸民族の文化的相互関係の形式と要因としてのキリスト教諸教会の意義は、その生活と活動の様々な側面で現れた。

1910年代ペトログラード県には570のフィンランド人の日曜学校が活動しており、都市内部では39のドイツ人の教区学校があり、ペトロ学校（Петершulle）とアンナ学校（Анненшulle）は帝国内でも最高のものに数えられた。リトアニア人とポーランド人にとって、もっとも重要な精神生活の拠点は1842年にヴィルノから移転されたカトリックの神学アカデミーで、貴重な図書館を備えており、一連の慈善団体が存在した。ペテルブルグのポーランド人コミュニティは農奴解放後、取り立てて数が多いこと（1917年で10万人以上）と活発な動きが目覚しかった。エストニア人の学校も4校活動していた。

エストニア人とラトビア人にとってペテルブルグは民族文化発祥の中心となった。というのもリーヴランドとエストランドでは完全にドイツ文化が支配的だったからである。帝国の首都では最初の演劇学校が設立、エストニア語、ラトビア語での演劇上演が行われ、しかるべき新聞が発行されて、民族宗教音楽のコンサートが催され始めた。ペテルブルグ在住のラトビア人とエストニア人の精神的・倫理的発展を促進したのは、「ラトビア社会集会」（1895年）、「ラトビア青少年教育協会」（1911年）、「クリトゥーラ（文化）」（1910年）、最初のラトビア語の新聞を出版した「スヴェート（光）」（同年）、ペテルブルグの「エストニア人協会」（1907年）、「ルター派信仰エストニア青年協会」（1897年）に違いない。

ペテルブルグにおけるこれら諸民族の文化的・社会的生活の結集点であったのはそれぞれの教区であり、まずルーテル教会のそれ、そして正教会のそれであった。1840年代にはリーヴランドでラトビア、エストニア農民のルター派から正教への自然発生的な大量改宗が始まり、1883年からはそれはエストランドの農民にも及んだ。土地を持たない農民はペテルブルグ県境の雇われ仕事に移り、首都と県内にエストニア人の教区が組織され始めた。主教区のエストニア人正教寺院の立役者の中には、クロンシュタットの聖イオアン神父のほか、列聖された6名の新致命者（内3人がロシア人で、3人がエストニア人の司祭）がいる。「正教＝ロシア的な原則導入のために」パーヴェル・クリブシュ司祭（殉教者プラトーン司祭）は、エストニア語で教え、ロシア語を学ぶ、エストニア人のための最初の教会・教区学校を創設する許可をもらった。

教会・社会活動、また文化活動は民族的な特徴から常に独立していたわけではない。多くの非正教共同体ははっきりとした民族的な性格をもっていたが、教区の中には混合的なものもあった。例えばクロンシュタットにはルター派の2教会—エストニア・フィン・スウェーデン聖ニコライ教会とドイツ・ラトビア聖エリサヴェータ教会—があった。これら非正教寺院は住民の民族的構成ばかりか、都市の外国との繋がりも反映していた。フィンランド語とエストニア語は同族語であったし、ラトビア人とエストニア人のかなり多くはドイツ語を解し、彼らの教区の牧師を務めたのはドイツ人であることがままあったためにも、コミュニケーションは容易であった。クロンシュタットでエストニア人正教徒のために買いだされたイギリス国教会の建物の中では、契約の条件にしたがって、どちらの共同体も祈禱を挙げる事ができた。

20世紀初頭にまさにサンクト・ペテルブルグで、ロシア人ルター派とロシア人カトリックの運動が発生したこと、また主教区においては7つの教区でエストニア人正教徒の監督司祭教区が組織されたことは偶然ではない。ロシア人ルター派の運動がペテルブルグのロシア化したドイツ人たちの末裔の間で当初形成され、伝統的な教区との結び付きが明白であったのに対し、ロシア人カトリックはその他のカトリックの教区からむしろ独立したものとして発生したものであり、エスニックなものではなく、理念的宗教的あるいは理知的な素地を持ったものだった。

ロシア人のカトリック、ルター派共同体の出現に関することを含め、国家権力と非正教の関係は常に青天白日といったふうではなかった。たとえば、ロシアとローマの間の長年にわたる対立の関係から、ローマ・カトリックの共同体の活動はある種の複雑さを帯びていた。第一次世界大戦もまたさまざまな宗教間、民族間の関係を一時的に先鋭化するものであった。10月革命の後の飢餓、破壊、弾圧、難民や捕虜の自国への帰国、外国籍の取得などによって、ペトログラードの非ロシア人人口は著しく減少した。

しかし、ロシアのルター派やカトリックの民族間のつながりは革命後強化された。一方では民族的な自覚の高まりと、さまざまな民族の文化的な自治体を創設するプロジェクトとの関係で、後に最高教会評議会と改名されるエストニア、フィンランド、ラトビアの総合監督法院が1917～1922年の間に組織された。他方、ソヴィエト指導部の反宗教運動が始まったことによって、信者たちは団結する必要に迫られ、1924年6月にはソ連福音派ルーテル教会最高宗教会議が組織された。この会議は国内すべての民族を統一する唯一の教会を創設することを宣言した。それほど目立ったものではなかったが同様の動きはカトリックの間にも見られた。

新権力が禁止したにも関わらず、多くの学校では1920年代末まで、レニングラードのルター派共同体では1938年まで、宗教教育が続けられた。この北の首都では1934年の夏までソ連で唯一のルター派神学校が機能していた。革命後もしばらくは宗教的な出版活動を行う余地が残されており、例えば1927～1930年にかけては教会カレンダーと雑誌『わたしたちの教会』がドイツ語で出版された。これもまたレニングラードで半ば合法的に存続していたカトリックの神学校は1927年に破壊された。1938～39年の大規模な反宗教キャンペーンで最後のルーテル教会が閉鎖された。カトリックの教会ではレニングラードにひとつだけ活動している教会が残ったが、そこでも1941年からは司祭がいなくなった。また当時党の州委員会と市委員会のビューローの決議案に基づいて大多数の民族学校と民族文化施設が廃止された。

迫害、強制収容所、流刑の状況下、人々の心の中に信仰は生き続けた。1950年代後半から追放されたフィン、ドイツ、エストニア系住人がレニングラードおよびレニングラード州に戻り始めた。1977年には長い断絶の期間を経てはじめてルーテル教会がプーシキン市に開かれ、フィンランド人＝インゲルマンランド人の精神的・文化的生活の中心となった。教会の大規模な復興が始まったのは1980年代の末のことである。現在、北の首都には18のルター派共同体と13のカトリック共同体が存在している。かつてと同じように、サンクト・ペテルブルグとその一帯は総体として、復活したロシア福音派ルーテル教会、イングリシア福音派ルーテル教会の中心地となり、またかなりの割合でロシア連邦におけるローマ・カトリック教会の中心地ともなったのである。

宗教的多様性、宗教的寛容、相互理解は歴史的・文化的に継承されてきたために、ペテルブルグにおいて現在も保たれている。それとともに聖使徒ペトロの街はなによりもロシア正教会の重要な拠点のひとつであり続けている。21世紀の初頭、サンクト・ペテルブルグ主教区では458の教区・登録教会があり（内218がペテルブルグ市内）、172の礼拝堂、12の修道院、17の修道院付属寺院が活動している。北の首都は正教神学教育の中心地でもあり、神学

アカデミーや神学校のほか3つの進学大学や多数の神学講座、学校などが教育に当たっている。サンクト・ペテルブルグの府主教は聖シノドの常任メンバーであり、市内にはモスクワ総主教庁渉外部支部が置かれ、教会アーカイブ文書の主要なコレクションがあり、ロシア正教会全体にとって意義を持ち、特に崇敬されている聖物が保存されている重要な寺院が点在しているのである。

(ロシア語から高橋沙奈美訳)

## 国際ワークショップ「十字路に立つヴォルガ・ウラル地域：帝国、イスラーム、民族」開かれる

長縄宣博（センター）

ヴォルガ・ウラル地域の研究は、1990年代後半にピークを迎え、すでに第二世代とも言える若手研究者が次々と現れております。近年の研究が示すところでは、ヴォルガ・ウラル地域は地域間比較の格好の題材を提供すると同時に、とりわけ、帝国、イスラーム、民族という問題群の結節点として、その重要性を強めております。このワークショップは、歴史研究を中心に、これまでの成果を総括し、さらに新たな研究課題に発展させるべく、日本、ロシア、アメリカ、ドイツ、トルコ、フランスから新



会議のあとに

進気鋭の若手とベテランの研究者を結集しました。会議は、独立行政法人国際交流基金と人間文化研究機構イスラーム地域研究東京大学拠点のご支援を受け、9月19日と20日の両日にわたって、カザン国立大学ロバチェフスキー図書館会議室で開催されました（スラブ研究センター共催）。詳細なプログラムと報告要旨は、以下で見ることができます。会議は、ロシア語でおこなわれました。

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/eng/20080919/20080919-j.html>

この会議は、16世紀から20世紀をカバーしていましたが、それはちょうど、碩学ミールカシム・ウスマーノフ教授（カザン大）が開会の辞で述べた言葉を借りれば、諸文明が交錯したこの地域の悠久の歴史におけるロシア時代に相当します。第1パネルで私たちはまず、この歴史的一幕において、「ヴォルガ・ウラル地域」という研究単位を設定すること自体の意味を問い直しました。チャールズ・スタインヴェデル（ノースイースタン・イリノイ大、米国）は、ヴォルガ中流域と南ウラルが、とりわけ現地民エリートの帝国への統合において、著しく対照的だったことを強調しました。そしてそれと同時に、この両地域が一体として、ロシア帝国・ソ連邦の西部・南部辺境における暴力的な多民族・多宗教関係に対するカウンター・モデルとなっていると主張しました。

私たちの会議では、内政と外交が交わりながら、ヴォルガ・ウラル地域の特性を形作って

いく過程にも注目しました。グリミラ・スルタンガリエヴァ（アクトベ教育大、カザフスタン）と濱本真実（人間文化研究機構 / 東大）は、ロシア帝国の拡大がいかに「近代のシルクロード」を維持し、この地域と特にカザフ草原西部を含む大経済圏の形成に寄与したのかを丹念に跡付けました。そして両者とも、仲介者としてのタタール人の役割を重視しました。イスマイル・テュルクオール（マルマラ大、トルコ）は、極めて魅力的なオスマン語の文書を駆使して、オスマン政府のロシア・ムスリムに対する態度を分析しました。第3パネルで小松久男（東大）が適切に指摘したように、ヴォルガ・ウラル地域のムスリム知識人とオスマン知識人との相互関係は、新たな史料の追加と他のムスリム地域との比較によって、さらなる研究の深化が期待されるところです。ディリャラ・ウスマーノヴァ（カザン大）は、ムスリムのモビリティとそれを可能にした財源との関係も今後、研究しなければならないと発言しました。帝政期のムスリム政策研究の基盤整備に多大な貢献をしてきた、ドミートリー・アラポフ（モスクワ大）は、ソ連のイスラームという次の研究課題の一端を私たちに示してくれました。その報告の中でも、ソ連初期の国内のイスラーム政策が、中東外交と密接な関係にあったことが強調されました。

戦争と宗教との関係も、私たちが取り組んだ重要なテーマでした。長縄は、ロシア軍の中におけるムスリム兵士に着目して、前線と後方において、ロシア国民を作り上げる試みと帝国の原則である信仰の寛容がどのような緊張関係にあったのかを分析しました。大祖国戦争が、ソ連の宗教政策の転換点になったことはよく知られています。その意味で、ナチス・ドイツのムスリム政策を長年研究してきたイスカンデル・ギリャーゾフ（カザン大）が、テュルク系ソ連兵士の対敵協力を一種のナショナリズムの表れだと論じたのは、刺激的でした。西山克典（静岡県立大）は、戦間期の日本政府が、ロシアからの亡命ムスリム知識人を国内外のムスリムを統合するために利用し、それを欧米の帝国主義に対する武器にしようとしたことを論証しました。

会議では、帝政期とソ連期の連続性と断絶に関する有益な議論が展開されました。私たちの議論は、ソ連崩壊後、人々が帝政期やそれ以前の遠い過去をソ連的な手法で取り戻そうとしている側面にも及びました。帝政期に関しては、「諸民族の牢獄」としてロシア帝国を糾弾するような議論が、現地の研究者の間でも廃れてしまったことが印象的でした。ウファから私たちの会議のためにわざわざカザンに駆けつけてくれた、ムスリム教育史のすばらしい専門家マルシル・ファルフシャートフは、ロシア帝国がソ連体制に比べて、「あまりに居心地がよかったのだ」と発言したほどでした。しかし同時に彼は、イルドゥス・ザギドゥーリン（歴史学研究所）やイルヌル・ミヌーリン（同）が帝政期のムスリム社会と国家との関係をやや理想化しがちだったことに対して、国家はどの程度、意図的にムスリムの日常生活を調整しようとしていたのか、と問いました。おそらく同様の問いは、ソ連時代にも向けられてしかるべきでしょう。つまり、ムスリム共同体の破壊や社会の世俗化は、国家の抑圧的な政策にのみ帰せられるべきなのではないでしょうか。私たちは、ソ連期やポスト・ソ連の宗教を論じる時、ともすればその強さや復興にばかり注目しがちです。しかし、人々の間に、信仰生活に縛られた「古い」社会からの脱却を目指す志向が全くなかったといえるのでしょうか。ポスト・ソ連期のイスラームの活力を正確に測定するには、これらの問いに答えていく必要があるように思われます。

興味深いことに、イルドゥス・ザギドゥーリンが「ロシアのウンマ」という言葉を頻繁に使用していたにもかかわらず、ロシア側の参加者の誰も、その用語法を怪しみませんでした。もちろん、「ウンマ」のアラビア語での原義は、世界のムスリム共同体の総体です。しかし、「ロシアのウンマ」という表現が当たり前となってしまっていること自体が、現代ロシア、と

りわけタタルスタンの政治的要請に大きく規定されている、独特なイスラーム復興のあり方を示しているように思われます。全体として、私たちは、ソ連期から現在までをカバーしたイスラーム地域研究が必要であるという意見で一致しました。その際には、連邦共和国と自治共和国でのイスラーム復興のあり方の違いなど、地域比較がますます重要になるとの認識を深めました。

聴衆はカザンの歴史学研究所の研究者が主でしたが、私たち外国人研究者の議論を、ロシアのムスリムに広く還元するように強く勧めてくれました。クサヴィエール・トリヴェレック（東洋言語文明学院、フランス）は、自身の報告を踏まえて、民族共和国ごとの歴史記述の分業に縛られている現地研究者間の対話を促すことができるのは、第三者としての外国人研究者による研究集会だと主張し、自分も近い将来、このような会議を組織したいと意欲を見せました。会議のペーパーは論文集としてロシアで出版予定ですが、それは、これらの方向に貢献することが期待されます。（文中敬称省略）〔長縄〕

## モンテネグロ滞在記

河原朗伸（北海道大学文学研究科博士後期課程 3年）

今回の留学は2006年6月のモンテネグロの独立に伴い新たに設けられた奨学金制度により実現した。9月に入ってスラブ研究センターから留学生に決まったとの知らせを受けてから約1ヶ月でのあわただしい出発となった。

2006年10月半ばから2008年6月末まで途中4ヶ月の一時帰国をはさんで、17ヶ月間モンテネグロ共和国のニクシチ市に滞在した。

モンテネグロ政府からの条件は、モンテネグロ大学哲学部の修士課程で2年間研究を行い修士号を取得できるということだったが、こちらが博士課程に在籍しているということもあり、むこうでも博士課程で勉強することになった。

私の日本での研究テーマはセルビアの民俗宗教についてであり、モンテネグロでは現地の儀礼や俗信について研究する事を希望していた。しかしむこうの文部省によると哲学部には該当するコースや指導教官がないとのことで、かわりに口承文芸を専門にする教官を紹介してくれた。これまで口承文芸はおろか、文学にふれることさえ無かったため大いに戸惑った。はたして留学期間の2年でどれほどのことが出来るのか不安だった。

日本を後にしたのは、2006年10月14日のことだった。モンテネグロへの道は遠かった。直行便などは当然存在せず、乗り継ぎをしてもポドゴリツァまでの安い航空券を見つけることは難しかった。ようやくチケットを手に入れ、札幌—中部国際—ドバイ—ウィーンと旅し



2008年元旦のニクシチ中心街



2008年旧暦クリスマスのニクシチ中心街

まれてニクシチ・ビールの産地として知られている。町には東ゴート人が造ったという城砦の址や、オスマントルコ時代のイスラム教寺院も残っている。初めて訪れたニクシチは町自体はこじんまりとしていて、いかにも地方都市、あるいは村落といった感じだった。町の中心部は北大キャンパスにすっかり収まってしまいうぐらいで、道を歩けば必ず誰かしら知り合いに出会った。

学生寮に入ると聞かされていたが、行ってみると外国人留学生にはホテルの一室が与えられるとのことだった。冬場は湯が出ない、頻繁に停電・断水がおこる、また自炊が出来ないなど不便なこともあったがおおむね快適に過ごすことが出来た。ホテルではロビーにPCを持って行かなければインターネットはできず、また回線も2つしかなく不便だったため利用しなかった。日本との連絡は学校の読書室や近くの携帯ショップにあるネットスペース(有料)のPCを利用した。よく停電やトラブルが起こり必ずしも快適とはいかなかったがほぼ毎日お世話になった。ホテルには長期滞在の客や学生もいて、その中のコトル(アドリア海沿岸の都市で世界遺産)出身のおばちゃんは、息抜きにと車でニクシチ近郊の自然やスカダル湖を案内してくれた。生来の出不精で、かつお金にも困っていたため旅行は諦めていたので、彼女の好意はうれしかった。

学部と図書館、学生寮、食堂はホテルから徒歩10分のところにあり日常生活の大部分をホテルの部屋が学校ですごした。奨学金として月150ユーロ(モンテネグロの通貨はユーロ)のほかにホテル代と食費も保証されていたので、3食ともに学生寮の食堂で食べる事ができた。料理は肉中心で味付けが濃く、塩と油を大量に使う。1口目は美味しいが食べ進めるに

たものの、ウィーンで飛行機の乗り継ぎに失敗し、空路でのポドゴリツァ入りはかなわなかった。止むを得ず空路で深夜ベオグラード入りし、そのまま夜行バスで10時間以上かけてようやくポドゴリツァに到着した。日本を出てまる2日が経っていた。

哲学部のあるニクシチはモンテネグロとボスニアを結ぶ交通の要衝で、首都ポドゴリツァの西北50キロメートルに位置する。石灰岩のごつごつした岩山に囲まれ、清らかな湧き水に恵



2007年旧暦クリスマス。喫茶店入り口に立てかけてあるのはバドニャク badnjak とよばれる儀礼用の木

つれ胃にこたえる。おまけに大柄なモンテネグロの学生たちの間であって小柄な日本人は目立つようで、食堂のおばちゃん達は「もっと食べなさい」と皆より多めに盛ってくれていたため全部食べると胃が震えた。それ故1日1食という日もあった。とはいえパスリ (pasulj) という豆の濃厚なスープやロールキャベツ (sarme) などは大変美味しく頂いた。

現地に着くとすぐに国際交流担当の教官と連絡を取り、指導教官と面会し、その場でテーマ

が決まった。指導教官は口承文芸、特に英雄叙事詩を専門とされる方で、はじめは2週間に1度、2年目は週に1度指導をしていただいた。ゼミの内容は英雄叙事詩、抒情詩、民話のテキストを読み、分析し小さな報告をするというもので、初めはやり方もわからず、また自分の言いたい事もうまく伝わらず苦労した。結局やり残したことも沢山あったが、話好きで豪快な指導教官からは、きわどい冗談も交えつつ多くの有益なアドバイスをいただいた。国際交流担当の教官に勧められ幾つか学部の授業にも出てみたが、結局は図書館で自習する事を選んだ。

学部内にある図書館はそれほど大きくはなく、資料も分野によって偏りがあり、物足りなく感じた。PCによる検索システムなどは存在せず、専ら職員のおばちゃんたちの記憶を頼りに本を探した。ただ見つかった必要なページだけがごっそり破り取られていたりしてガッカリしたこともある。結局図書館では資料収集はせず専ら自習ばかりしていた。ニクシチには小さな本屋が3件あるが学術書は少なく品揃えも限られており、またセルビアで出版された本が断然多い。ポドゴリツァには大きめの本屋もあるがやはり似たような状況で必要な本は手に入れにくい。

古書店はポドゴリツァにすらなく、郵便事情や料金も考えれば本を買うならセルビアのベオグラードやノビサドに行ったほうがよいだろう。また文献のコピーも蔵書検索の利便性などを考えると同じことが言えると思う。実際私も2度の帰国の際セルビアに必要な資料のほとんどを揃えた。ただ、ここ何年か、年に1度ポドゴリツァでも本の市が催され、規模こそベオグラードの本の市には遠く及ばないが、いい本を安く買える機会ができたのはうれしかった。



ある日の昼食



指導教官のキリバルダ教授と



ん (----)』が、クラーク会館にゆく道にもついていなくていいんですか？」

M 教員「…イインデスヨ！コッチコナクテモ！文系共用棟ノハウダケユケバ！…」

その鼻毛を膨らませた狼狽ぶりをみて、引っ越しが済んだら必ずやクラーク会館を探訪しようと、筆者は固く心に誓った。

\* \* \*

引っ越し作業は、想像を絶する大変さであった。だが、文系共用棟の方に移ってみると、プレハブとはいえ現代的な造作に、「もうここで十分」という声も聞こえた。

\* \* \*

さて、引っ越し後の混乱も大概落ち着き、後期授業もいまだ始まらず、の時期に入り、筆者は自らに課した公約を果たすべく、自前のデジタルムービーカメラ SanyoXacti を手に取った。

クラーク会館は、かのクラーク像が面する構内ロータリーの南側に位置する、鉄筋三階建ての建物である。物の本によると、「日本の国立大学では最初の大規模な学生会館」なのだという。巷では、大講堂にパイプオルガンがあることで有名だ。一般的には、北大生協の食堂がよく利用されている。

では、どこに我らがスタッフはいるのか？まさかパイプに挟まっているわけではあるまい。

聞けば、その昔ここは宿泊業務を営んでいたことがあり、その施設が残っているという。

まずは会館の中に入ってみる。正面玄関は、階段を上ったところにある。(写真1) ここが2階に相当する。中に入ると、広いロビーとなっており、十数名の人々が憩っている。向かって右手は大講堂だ。向かって左手に北大生協の食堂やルームガイドサー

ビスなどがある。よく見ると、奥の方に、もう1階ぶん上、即ち3階部分に昇ることのできる階段がある。(写真2) この階段を昇ってみると、ロビー上方の吹き抜け部分を取り囲んだ、「コの字」型の展示スペースに出る。(写真3) さてここからどこへ？

ふと左手の壁を見ると、黄色いシャッターのような扉がついている。ここは丁度大講堂の上にあたる所だ。この扉をおもむろに押してみると…隠された通路が現れた。(写真4)

そう、大講堂の天井部分の周囲を取り囲むように、宿泊室その他付帯施設が密かにグルッと存在しているのだ。こうして、筆者はいささか怪しげな通路を踏み出した。

\* \* \*

では、各室の概要を述べよう。

1. 黄色い扉をあけた一番手前の室は、ここだけ畳敷きの和風仕様になっている。おもむろに扉を開けると、さながら21世紀にいきながらえた座敷童のようなMZ教員がモニタの向こ



写真1



写真2



写真3

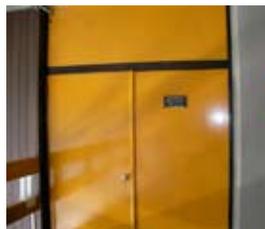


写真4



写真5

うからニョキッと顔を出した。そのうち、畳から怪しげな魑魅魍魎が飛び出してヒップホップを踊る日が到来するかもしれない。(写真5)



写真6



写真7

2. 標準的な室は、要するにビジネスホテルのシングルルーム仕様である。(写真6) ただしベッドはついていない。ごく一部の室には、ユニットバスがついているが、トイレとバスは現在使用不可の状態である。よって、結果的に物置状態になっている。(写真7)

3. 角部屋は、南側と北側に計2室あるが、標準よりもかなり大きな室である。もともと家族で宿泊可能な仕様に造られたものだろう。この室には、相当広いバスルームと台所までついているが、先述のとおり使用不可である。とはいえ非常口および男子トイレに最も近い南側角部屋

に住むM教員は、いざという時逃げ遅れる心配もチビる心配もなく、泰然と暮らしているそうである。(写真8)



写真8



写真9

4. 南側角部屋から北側角部屋へ向かう通路は、順に非常口・男子トイレ・女子トイレ・旧宿泊受付・浴室の各設備がある。旧宿泊受付の前の廊下には、スラ研から運んだ複写機が1台置いてある。(写真9) 筆者の取材時、通常は閉めている浴室が開いていたため、中を見学させてもらった。(写真10) 中は脱衣所・洗面台・風呂場と、意外としっかりした家庭的なしつらえであった。残念ながらここも現在は使用できない設備である。



写真10



写真11



写真12

5. 北側角部屋も大きな室で、前室を抜けて中に入るのだが、バスルームおよび台所が付設している。しかしここも使用不可なので物置状態となっている。(写真11) ここにはT教員とI教員(休暇中)が入室しているが、開封していないダンボール箱が山積みとなっていた。(写真12)

6. 取材終了時、北側廊下に出てみると、たまたま大講堂の映写室に通じる扉が開いて関係職員が出てきた。ついでに機会なので、廊下から内側を見た所を撮した。暗かったので少々わかりづらいが、奥の向かって左側の壁際に映像装置が見えている。(写真 13)

\* \* \*

とまれ、クラーク会館には第三者をして狼狽たらしめるものは客観的に何もなかった。いや、これまでの描写を読めば十分怖いよ、という意見もあるかもしれない。これは自らが行って確かめてみるしかない。百聞は一見にしかず。皆様お暇ならどうぞ。



写真 13

\* \* \*

そうそう、せっかくクラーク会館にお近づきになったことではあるので、ここの目玉である大講堂のことに言及しよう。

この講堂はちよくちよくパイプオルガン演奏会が催される。それ以外にも、各種研究会や講演会、入試監督説明会などの事務的な集まりも行われる。構造が半地下のようになっているので中は薄暗いのだが、何か催し物を行うにはいい雰囲気が出ていると言える。

他方、ごく最近知ったのだが、スラブの専任スタッフには舞台映えのする、隠れた肉体芸を持っている人々が多い。そこで提案だが、お世話になった御礼に、スラブのスタッフによる出し物をここで披露しては如何だろう。

例を挙げると、IW 教員の社交ダンス + MZ 教員のブレイクダンス + T 教員のエアロビクス技術を取り入れたフリーキック + M 教員の正統派居合い抜き + H 教員のベリーダンス別名腹踊り、とナンバーは尽きることがない。BGM には院生諸氏の奏でるミサ曲がびったりくるだろう。「萌え」系のコスチュームの歌い手が登場すれば完璧になるだろう。

ちなみに筆者は何をするのかという質問がきたので、蛇足で付記する。「教養文化人として芸術を愛する者を育てる場所<sup>(3)</sup>」として建立されたクラーク会館なのだが、それゆえ筆者の編み出す芸術作品はここで公開するにふさわしいのだが、近時なぜかこれら芸術性が理解されず禁忌処分を受けている。なので、これが解禁になれば可能なのだが、今のところ何とも言えない状況である。解禁希望者は、下記まで連絡をくれたし。

src@slav.hokudai.ac.jp

3 北海道大学オルガン研究会「クラーク会館のオルガンについて」URL: <http://www.organ.dyndns.org/organ/clarkorg.pdf> より抜粋。

## 学 界 短 信

### ◆ 日本ロシア文学会定例総会開かれる ◆

10月11日(土)、12日(日)の両日、中京大学において日本ロシア文学会第58回定例総会・研究発表会がおこなわれた。研究発表会では、文学、言語、文化・芸術・思想などの3分野に分かれて合計25の研究発表がおこなわれたほか、「ロシア文学にとって翻訳とは何か?」「チェストウシカの複合的研究に向けて」の2つのワークショップが開催された。またトルストイ生誕180年を記念して、藤沼貴氏による公開の講演会「トルストイと平和をめぐる」

がおこなわれた。総会では本年度学会賞受賞者として水野晶子さん（名古屋大学）、高橋沙奈美さん（北海道大学）の2人が表彰された。

今回はロシア・東欧学会、JSSEES、ロシア史研究会との4学会共同プログラムとして、11日には「スラブ・ユーラシアの将来を考える：講座『スラブ・ユーラシア学』合評会」、12日には共同シンポジウム「ロシア・東欧の歴史と現在」という特別企画が生まれ、学会間の対話に向けての貴重な機会となった。

来年度のロシア文学会定例総会・研究発表会は10月24日（土）、25日（日）に筑波大学でおこなわれることになった。[望月]

### ◆ 比較経済体制学会秋期大会開かれる ◆

10月18日（土）に横浜国立大学において比較経済体制学会第7回秋期大会がおこなわれた。昨年あたりから、秋期大会でも共通論題が設定されるようになっており、今年の共通論題の1つは「社会主義経済体制論におけるブルスとコルナイ：回顧・評価・展望」であった。これは大津定美代表幹事（大阪産業大学）の提案によるものであり、佐藤経明（横浜市立大学名誉教授）、中兼和津次（青山学院大学）、盛田常夫（Tateyama Laboratory Hungary Ltd.）の3氏による報告がなされた。もう1つの共通論題は「家計と貧困の移行経済論」とされ、こちらは新鋭の若手研究者がパネリストとして登壇した。このほかに、8本ほどの自由論題報告があり、全体としても活発な意見交換がなされたように感じられた。

セッションの合間に、学会の若手研究者に贈られる今年度の研究奨励賞が、金野雄五氏（みずほ総合研究所）に授与されることが発表された。受賞対象は、今年3月に北海道大学大学院で博士号（学術）を取得した博士論文「ロシアにおける対外経済関係の自由化の一考察：多角的貿易自由化と地域経済統合の展開を中心として」であった。[田畑]

### ◆ サハリン・樺太史研究会の発足 ◆

今年5月6日から7日にかけて、サハリン国立大学で「サハリン：植民地化の歴史的経験」と題する国際シンポジウムが開催された。これは、2005年と2006年に同大とセンターで開かれた連続シンポジウム「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」の後継に位置づけることができる。今回は日本から8人、ロシア側から14人の報告者がたち、その模様はNHKをはじめ各種メディアでも報じられた。

このように構築されてきた国内外の連携を基盤に、このほど「サハリン・樺太史研究会」が立ち上げられた。一国史単位の研究では把握しきれない場という研究対象にふさわしく、ロシア史・日本史の垣根も海も跨いだ研究者間のネットワークの拠点として組織されたものである。

具体的活動としては、北樺太保障占領（1920～1925）など主としてサハリン近現代史に関わる共通テーマを設定して共同研究を進め、定期的に研究報告会をもちながら、会としての研究成果を発表することを目指している。また、5月のシンポジウムの報告集がサハリンで出版されることを受けて、これを邦訳・出版する作業も現在進行中である。

研究会についての問い合わせは、天野尚樹（北海道大学大学院博士後期課程、e-mail: amnk775@aol.com）まで。[天野]

### ◆ 学会カレンダー ◆

2008年11月20-23日 米国スラブ研究促進学会（AAASS）年次大会 於フィラデルフィア  
11月22日「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第1回研究会

於メルパルク KYOTO 詳しい情報は [http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/index.php/news\\_detail/id/182](http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/index.php/news_detail/id/182)

- 12月13日 特別シンポジウム「どうなる？ 資源大国ロシア」於立正大学  
 2009年1月10日 国際ワークショップ「人文学的アプローチによるポーランド地域主義研究：言語・文化・芸術を通して考えるポーランドの周縁地域」於東京大学（記事参照）  
 2月5-6日 第1回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス 於北海道大学（記事参照）  
 3月5-6日 スラブ研究センター冬期国際シンポジウム（記事参照）  
 6月6-7日 比較経済体制学会全国大会 於国学院大学  
 10月24-25日 日本ロシア文学会定例総会 於筑波大学  
 11月12-15日 米国スラブ研究促進学会（AAASS）年次大会 於ボストン（パネル公募締切りは2009年1月16日）  
 2010年7月26-31日 ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）第8回世界会議 於ストックホルム（パネル公募締切りは2009年2月28日）
- センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。  
 [大須賀]

## 図書室だより

### ◆ 新潟市美術館「浦塩とよばれた町」展に出品 ◆

新潟市では、新潟の開港140周年記念行事のひとつとして9月2日から10月19日の間、新潟市美術館において「浦塩と呼ばれた町」を開催し、姉妹都市ウラジオストクと日本との交流にかかわる品が展示されました。

本センター図書室は、同館の求めにより、この展覧会に、シベリア出兵時に日本軍の関係者によって撮影されたと思しき写真帖4冊を出品しました。内戦期の市内の表情を伝えるスナップショットが、小品ながら、評価をいただいたようです。

展示会の図録は、同館において、1冊1500円にて頒布されています。[兎内]

## ウェブサイト情報

2008年8～10月までの3ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く）の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
8月	387,405 (12,913)	11,795 (393)	2,277 (76)	102,090 (27%)	218,766 (56%)	66,549 (17%)
9月	336,584 (11,219)	10,517 (351)	2,517 (84)	101,545 (30.2%)	173,114 (51.4%)	61,925 (18.4%)
10月	405,078 (13,067)	12,108 (391)	2,458 (79)	107,119 (26.4%)	227,872 (56.3%)	70,087 (17.3%)

## 編集室だより

### ◆ スラヴ研究 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第56号への投稿は8月末で締め切られました。13件の応募があり、2009年春の発行を目指して現在審査をおこなっています。[宇山]

## 会議 (2008年8～10月)

### ◆ センター協議員会 ◆

2008年度第5回 8月15日

議題 1. 北海道大学スラヴ研究センター図書室内規の変更について

## みせらねあ

### ◆ センター共同研究員の井潤裕さん、第42回北海道新聞文学賞受賞 ◆

センターのCOE共同研究員の井潤裕さんが、第42回北海道新聞文学賞の「創作・評論部門」で佳作を受賞されました。受賞作品は、小説「にこうきだん厄港奇譚、あるいはコンスタンチン・フォルドピッチの肖像」(未発表作)です。井潤さんは、2000年に北海道大学大学院工学研究科で博士号を取得され、2004年から2年間、センターで21世紀COE非常勤研究員に採用され、「近代サハリンの歴史と文化」をテーマとする研究を行いました。[編集部]

### ◆ 発信体制の強化：ホームページ刷新・ 「スラヴ研究センター・レポート」の刊行など ◆

センターは、その多彩なりソースをフルに稼働させて、内外への発信機能を高めていこうと考えています。この8月より、ホームページを一新し、研究員によるエッセイ、各種イベントの最新情報、スラヴ・ユーラシアをめぐる現状に対するホットな分析などを日々、載せています。また特に時機にかなった話題をみなさまの眼にとまりやすくすべく、ホームページのなかに「窓」を設け、週替わり程度を目標に内容を更新しています。

またサービスの効率化と経費削減をかねて、イベントの申し込みをホームページ上で受け付けたり、ニュースレターの本体がホームページから直接ダウンロードできるようにもしました。年明けにはメールマガジンを創刊し、みなさまのメールアドレスに直接、最新情報を

お届けし、そのなかでご関心をお持ちのコンテンツにすぐにホームページを通じてアクセスできるシステムを構築したいと考えております。

なかでもコンテンツの発信という意味で、目玉となるのが、「スラブ研究センター・レポート」です。創刊号として9月11日に笹川平和財団と共催でおこなった、「ロシアと米国の新冷戦？ ユーラシアの今を読む」の会議の様をまとめました。「レポート」は紙媒体をつくらず、センターのホームページからのみ読むことのできるオリジナルなコンテンツとして育てて行きます。今後、どのようなレポートがみなさまのもとに届くことになるか、どうぞご期待ください [岩下]

### ◆ 人物往来 ◆

ニュース 114 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。  
[松里／大須賀]

- 8月5日 山口昭彦（聖心女子大）
- 8月18日 エルドリッジ（Robert Eldridge）（大阪大）
- 9月1日 木裕子（大阪大・院）
- 9月11日 粕谷典子（早稲田大・院）
- 9月19日 細井長（国学院大）、上垣彰（西南学院大）

### ◆ 研究員消息 ◆

家田修研究員は7月30日～8月26日の間、科学研究費研究に関する資料収集、研究打合せ、研究報告、及び委託調査結果取りまとめのため、英国、ハンガリー、スロヴァキアに出張。また、9月6～13日の間、科学研究費研究に関する調査及び研究打合せのため、ハンガリー、イスラエルに出張。

田畑伸一郎研究員は8月24日～9月2日の間、科学研究費研究に関する調査、資料収集、及び成果発表のため、ロシアに出張。

長縄宣博研究員は9月10～26日の間、カザン国立大学での国際ワークショップの組織・報告及び資料収集のため、ロシアに出張。

宇山智彦研究員は9月18～23日の間、Central Eurasian Studies Society 年次大会において近現代中央アジア地方史研究成果発表のため、米国に出張。

松里公孝研究員は10月16～19日の間、中央研究院政治学研究所「準大統領制国際会議」にて報告のため台湾に出張。



Hokkaido University **Slavic Research Center Report**

NO.1 2008年10月3日

**北大スラブ研究センター・笹川平和財団 共催シンポジウム**  
**「ロシアと米国の新冷戦？ ユーラシアの今を読む」**  
 2008年9月11日：日本財団ビル（東京）

2008年8月初頭、北京オリンピックが世界の注目を集めるなか、南軍が駆けめぐりました。南オセチヤに対するグルジアの軍事行動、それに対するロシアの過剰ともいえるグルジア領内への「反撃」。当初、南オセチヤを越えてグルジア領内に突入したロシアの行為を冷静にとらえ、これは「1968年（ソ連軍によるチェコスロヴァキア）の再演ではない」「冷戦の再来はない」と自衛を公していた米国のタムソン国防長官も、南オセチヤの「人権擁護と平和」を理由にグルジアに併置し続けるロシアへの非難をセーブアップ。ロシア大統領メドヴェージェフも「ロシアは自ら望まないが、冷戦をおそれることはない」と見解を切り、南オセチヤやアブハジアの独立承認を宣言。欧米はロシアによる承認の即時撤回を要求。冷戦終結後、米ロの緊張がここまで高まったことはこれまでありません。普段、ロシアに関心を示すことのないワシントンの政策コミュニティも久々にロシアについて真剣に議論を闘わせています。

こうした事態の重要性に鑑み、北海道大学スラブ研究センターと笹川平和財団は、2008年9月11日に、東京で緊急シンポジウムを下記の要綱で開催いたしました。当日はおよそ120名の参加者が見まらるなか、現在の情勢と今後の展望をどのようにとらえるべきか、世界的な安全保障問題の「観戦」としてのユーラシアをテーマに、中東からの視点も含む多角的な観点で議論を行いました。以下が、当日の記録となります。

(岩下明裕)

日時：2008年9月11日（木） 14:00-16:00  
 会場：日本財団ビル2階 大会議室（東京都港区赤坂1-2-2）  
 プログラム：  
 14:00 開会挨拶 小林香織（笹川平和財団） 岩下明裕（北海道大学スラブ研究センター）  
 14:10-15:30 報告・討論  
 「ロシア連邦における非承認国家：整理されてきた視角」  
 松里公孝 北海道大学スラブ研究センター教授  
 「グルジア紛争の三層構造：ローカル、リージョナル、グローバル」  
 宇山智彦 北海道大学スラブ研究センター教授  
 「ロシア軍によるグルジアへの軍事行動をどう読むか」  
 兵衛真由 防衛省防衛研究所主任研究官  
 コメンテーター： 松本英光 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授  
 司会： 岩下明裕 北海道大学スラブ研究センター長  
 15:30-16:00 質疑応答  
 16:00 閉会

【小林香織】 本日は皆さま方においでいただいたことに、大変、感謝申し上げます。今日は9月11日です。思い起こせば2001年9月11日の同時多発テロ以来、国際情勢は様々な

1

# 今年のスラブ研観楓会は足を伸ばして苫小牧のノーザンホースパークへ (2008.11.1)



引いてくれる人がいるから安心な乗馬体験



ぴったり息が合って爽快に走る2人乗り自転車



ゴーカートもいいね



クッキング・パパ



どうせ昼から飲んで一日つぶれるなら、今日みたいに遠出したほうが気分転換になっていいな

## エッセイ

M.シユカロフスキー	サンクト・ペテルブルグ：ロシアのキリスト教教会の中心地として	p. 7
長縄宣博	国際ワークショップ「十字路に立つヴォルガ・ウラル地域」開かれる	p. 11
河原朗伸	モンテネグロ滞在記	p. 13
山下祥子	クラーク会館探訪記	p. 16

2008年11月17日発行

編集責任 大須賀みか  
編集協力 田畑伸一郎  
発行者 岩下明裕  
発行所 北海道大学スラブ研究センター  
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目  
Tel.011-706-3156、706-2388  
Fax.011-706-4952  
インターネットホームページ：  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>